

桃米が教えてくれたこと

MESSAGE

大桃美代子

OOMOMO Miyoko



プロフィール

ニュース番組をはじめ、料理、クイズ、バラエティ、情報と幅広い分野で活躍。2005年4月より韓国に語学留学をするほどの韓国通。留学体験などを綴ったブログ「韓流への道」(<http://yaplog.jp/o-momo/>)。2004年10月に起こった「中越地震」を新潟県魚沼市の実家に帰省中に被災。現地からの情報を伝えた。2005年11月に「魚沼特使」に任命され復興のために活動している。日本災害復興学会 名誉会員。雑穀アドバイザー(日本雑穀協会)、野菜ソムリエ(ジュニアベジタブル&フルーツマイスター)、おさかなマイスター・アドバイザー(日本おさかなマイスター協会)パンコーディネーター(日本パンコーディネーター協会)の資格を取得するなど食育や農業に関心を持ち、2007年より、新潟県魚沼市にて古代米(桃米)作りに挑戦中。売上の一部を地震復興に充てている。環境省の「地球いきもの応援団」のメンバー。

2004年の新潟県中越地震を、魚沼市の実家で被災し、ふるさとの壊れた姿をレポートすることになりました。そのときに感じたのは「復興には時間がかかる。この被害を風化させてはいけない」という思いでした。時間が経つと、テレビでもラジオでも報道が少なくなり、被災地の状況は忘れられていきます。復興の姿を見てもらうには、地元からの発信が必要でした。タレントの私が農業をすることで、復興の姿をお伝えし、地域を活性化するお手伝いができたらと、お米づくりを始めたのです。

私が目指したのは「自分が食べたいと思うお米づくり」。無農薬で作ったお米は都会で人気があります。そこで健康志向の人に人気の古代米を、無農薬で作ることにしました。古代米は糠の部分に黒い色が付いていて、これがポリフェノールの一種、アントシアニン。人間の老化原因物質の活性酸素を除去してくれる注目のお米なのです。

兼業農家である父は「無農薬では稲が育たない。収穫量が減る」と反対しました。そんなとき、無農薬で古代米を育

てている富山の人に会い、栽培を教えていただくことに。使う肥料は米糠、炭の粉、魚粉だけ。米糠は雑草を生えにくくする作用があります。炭の粉は炭の多孔質がバクテリアを繁殖しやすくして、土壌改良に役立ちます。魚粉は土壌に足りないカリウム成分をプラスするため。これまで、田んぼに入ったこともほとんどなかった私が、いきなり生物や科学を農作業から学ぶことになりました。学校の教科書で学んだことは理解できなかったのに、自分の生活や皮膚感覚に直結すると理解できるのです。植物が育っていくということは太陽の光、土、植物の化学反応なのです。

田植えから10日で、無農薬の私の田んぼは雑草で一杯になりました。クログアイという根に塊根を持つ草。生える前に農薬を撒けば生きてこないのですが、なんせ無農薬で栽培していますから。塊根があるため、手で引き抜くしか方法はありません。いまどき、手で草取りなんてしないのだそうです。農業従事者の平均年齢65歳。重労働は機械や農薬が替わってやってくれるのです。地球にやさしい農業は、人間には優しくはない!

へとへとになっていると、田んぼの中に黒い影が…。オタマジャクシです。ウヨウヨいます。草取りで手を伸ばすと、ササーって逃げる。最初は「気持ち悪い～」と飛び上がっていましたが、よく考えたら、そのうち手が出て、足が出てカエルになって、稲に悪さをする虫を食べてくれるお仲間さん

です。そう思ったらかわいく見えてきて、触れるようになりました。

私の田んぼには沢山の生き物がいます。ミミズとそれを食べるモグラ。カエルとそれを食べる蛇。蛇を食べるイタチも…。循環です。他にもフナ、ドジョウ、ゲンゴロウ、アメンボ、クモ…。「どれくらいいるのか?」と、地元小学校の子どもたちと「田んぼの生き物調査」をしたところ、約30種。田んぼの中、畦、用水路にはシジミもありました。生き物が多いということは、その土地の豊かさの証明です。自分たちが生きていけるのは、多くの生き物の犠牲や恩恵のうえに成り立っている。ひとつの種がなくなることは、自分の命の可能性が減っていくこと。田んぼの中で繰り広げられる、生き物の生存競争に私たちの食はゆだねられている。生き物調査をしながら感じたことです。

私の作った古代米(桃米)が食卓に並ぶとき、田んぼの生き物たちの命のつながりを感じてもらえたら幸いです。生きること、食べること、その裏にあるストーリーを想像すること。これが人間に与えられた優れた特徴のひとつだと思います。私たちの生活が他の生き物の命を奪うのなら、「どこまでして、どこまでしてはいけないのか」の制約を考えることも必要です。田んぼの生き物はしゃべらなくても多くを教えてください。

私の田んぼで草取りをしてみませんか?

三重県熊野市丸山千枚田(写真:小澤宏二)